地域活動の勧め

平　修久

一　はじめに

今年はコロナウィルス感染症拡大のため、部活も含め様々な活動が制限されています。コロナウィルス感染症が収束した後に、今年、貯めに貯めたエネルギーを地域活動にも向けてもらいたいと思います。

地域やまちには、様々な問題や課題があります。問題の内容や深刻さは、それこそ、まちによってまちまちです。皆さんの中には、これらの問題・課題に取り組むために勉強している人もいると思います。

まず、子どもに着目すると、子育て、子どもの貧困、引きこもり、学校の統廃合などが気になります。人口減少は、空き家問題、商店街の衰退、そして買い物難民を発生させます。それに加えて、高齢者・障がい者など、生活支援を必要とする人が増えています。地域の人々のつながりが弱まる中で、居場所づくりも課題となっています。振り込め詐欺などの犯罪、台風などの自然災害、交通事故など安全面の問題もあります。さらには、カラスや野良猫の増加、ゴミの不法投棄、近隣騒音、緑の減少、落書きなどの環境問題もあり、リサイクルの推進も課題となっ

ています。

次に、このようなまちは誰のものか考えてみましょう。まちには、性別、年齢、職業などが異なる色々な人が住み、毎日、多様な活動を行っています。まちは、国や市や特定の人のものではありません。まちはみんなのものです。みんながまちの主人公です。主人公ですから、行政に要望を出したり、意見を言う権利が、みんなにはあります。その一方で、まちを守り、良くすることに責任もあります。主人公だからと言って人任せにして何も行動しなければ、まちは良くなりません。

行政学には、住民が地方自治の主人公という考え方があります。それでは、「自治」とは何でしょう。「自ら治める」とは具体的にはどういうことでしょうか。自治とは、みんなで幸せに暮らせる地域社会を築くこと、と言い換えることができます。

どのようにして自治を実現することができるのでしょうか。それには三つの方法があります。

一番目は、市役所などの行政を信じて託し、役所にまちを整備してもらったり、行政サービスを提供してもらう方法です。いわば、税金を納めサービスを受けるというものです。二番目は、市民自ら、市民だけで活動し、まちを良くする方法です。三番目として、市民と行政が協力してまちを良くする方法があります。当然、一番目が圧倒的に多いですが、二番目、三番目の方法もあるのです。

二　私たちはどのようなことができるのか

それでは、私たちはどのようなことができるのでしょうか、八つの事例を通して考えてみましょう。

一番目は、多くの人が小学校の運動会で踊ったYOSAKOIソーランです。これを一九九二年に始めたのは、北海道の数人の大学生です。北海道のソーラン節と高知のヨサコイ踊りを融合させた、エネルギッシュなパフォーマンスです。今では、全国各地で祭りが行われていますが、第一回は、警察から道路使用許可がなかなか得られず、最後はデモ行進として許可を得て実施しました。道路使用許可は一車線のみだけでしたが、勢いあまって二車線使ってしまい、後で、警察に厳しく注意されたというエピソードもあります。このように、まちを舞台にした活動が可能です。

二番目は、田中元子さんが始めた「マイパブリック」です。二〇一五年から、公園や道端で、小さなパーソナル屋台を使ってコーヒーなどを振る舞うことにより、新しい人間関係を作り出しています。田中さんは、「人が能動性をもってまちへ出ること。そこから何かが変わるはずです。」と言っています。田中さんの考え方に共鳴し、若者が街中で花をプレゼントしたり、あちこちでパーソナル屋台が出現しています。このように、何かを無償で提供することにより、まちの雰囲気を良くすることができます。

三番目は、まちの清掃活動グリーンバードです。「きれいな街は、人の心もきれいにする」をコンセプトに誕生した原宿表参道発信のプロジェクトです。合言葉は“KEEP CLEAN, KEEP GREEN.”です。各地で清掃活動が展開され、埼玉県内では大宮で活動しています。一人ではやる気がなかなか起こりませんが、ゴミ拾いもみんなで行うと楽しいものです。活動の成果は一目瞭然です。

四番目は、ミニさいたまです。これは、ドイツのミニミュンヘンのさいたま市版です。子どもが働いて得たお金（会場でのみ使用可能）で、食べたり遊んだりする、子どもによる子どものまちです。実行委員会には大人や学生に交じって小学生も参加し、自分たちのやりたい店などを実現させています。参加者の小学生はまず、ハローワー

クで仕事を得ます。仕事としては、花屋などの店のほか、旅行社もあります。大人はツアーに参加しないと会場内には入れません。市長選挙も行われ、当選した子ども市長と本物のさいたま市長のツーショットの場面もありました。このように、子どものためのイベントを企画・支援することも可能です。子どもが一生懸命働く姿や純真さは、見ていて感動を覚えます。

聖学院大学が関わった事例もあります。まずは、毎年一〇月後半の日曜日に、宮原駅西口ロータリーで開催されるKI-TA祭りです。地元のさいたま北商工協同組合を中心に実行委員会が結成され、学生も委員会に出席したりします。毎年、約一万人の来場者を得て、ステージトラックでのパフォーマンス、世界のグルメ、フリーマーケットなどで一日楽しい時をすごします。二〇二〇年は、コロナウィルス感染拡大のため残念ながら中止です。

聖学院大学の学生も、これまで、軽音楽部、聖歌隊、チアリーディング部などがパフォーマンスを行い、最近では、ベトナムの留学生を中心にエスニック料理を販売しています。地元の方が、KI-TA祭りは学生抜きには開催できないとして、学生の活躍を毎年期待しています。

次は、大学の前を流れる鴨川の橋の一本上流側の橋を渡ったところにある三貫清水緑地で野点（のだて）などを楽しむグリーンフェスタです。ある人が、「ここでお茶を飲めたらいいね」とつぶやいたことからイベントを実現させました。茶道部のお点前を楽しんだり、大宮北高校の琴の演奏を聴いたり、新緑のさわやかな季節の一日をまったりとすごすイベントです。

ゼミ単位でもまちに関わることは可能です。宮原駅西口のコンコースの活用方法をゼミで考え、花のプランターを置くことにしました。まず、この場所を管理しているさいたま市にプランターの設置許可をとり、次に、宮原駅の近くにある「ひびき」という知的障がい者施設の通所者と一緒に花植えを行いました。毎日の水やり当番を決め、

図１　YOSAKOI ソーラン

出典：https://iko-yo.net/events/150800

図２　マイパブリック

出典：https://tbma.jp/wp/wp-content/uploads/2015/09/th_150801_0385-1024x682.jpg

図３　清掃活動グリーンバード

出典：https://www.greenbird.jp/team/omiya

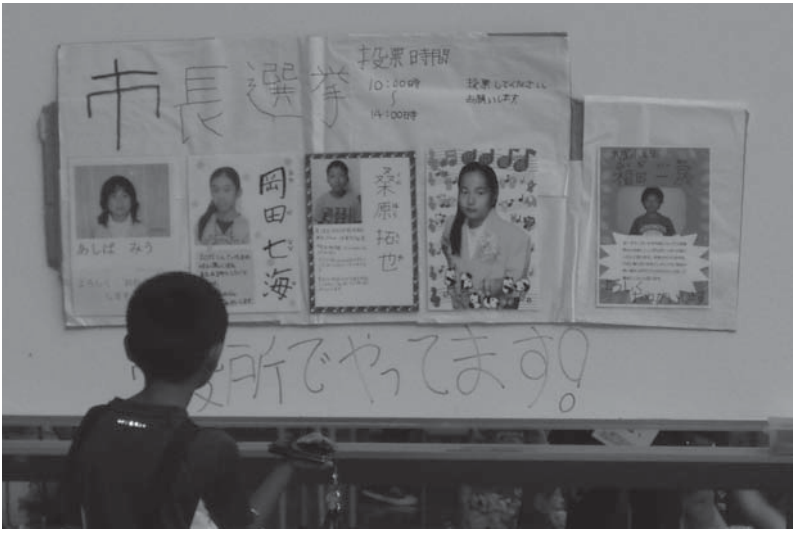

図４　ミニさいたま

出典：筆者撮影

図５　KI-TA 祭り

出典：筆者撮影

図６　グリーンフェスタ

出典：筆者撮影

図７　花のプランター

出典：筆者撮影

図８　桜の名所づくり

出典：筆者撮影

駅のトイレの水を使わせてもらいました。水を撒いている時に、まちの方から感謝のことばをもらった学生もいました。

最後の事例は、上尾市が市になってから五〇年を記念して行った桜の名所づくりです。一緒に行った上尾市民の方が植樹場所を見つけ、新しくできた公園に桜を二三本植え、今では見事な花を咲かせています。併せて、学生のスキルを使って上尾市の桜マップも作成しました。

八つの事例を見て、自分たちにも様々なことができることがわかったと思います。公共の空間を使ったり、他の人に関わってもらったりするので、それなりに責任があります。許可をとったり、計画を立てたり、仲間をつのったり、大変です。しかし、それ以上に得られるものがあるので、多くの人が地域活動を行っているのです。

三　学生のアドバンテージ

このような活動に学生も参加できるのでしょうか。もちろん、できます。地域の方々は喜んで受け入れてくれます。地域のために活動する学生がまだまだ少ないので、参加することだけでも喜んでもらえます。

何より、学生が優位な点は、自分で使い方を決めることのできる自由な時間が多いことです。勉強やアルバイトで忙しい人もいるかもしれません。しかし、社会人から見ると、それでも自由になる時間が多いはずです。

次に、学生には肩書がありません。まわりの人に気を遣う必要はあまりなく、自由に発言したり、行動したりすることができます。地域の人間関係や過去のいきさつにとらわれることがなく、いわゆる、しがらみがありません。まちづくりの担い手は、若者、よそ者、ばか者とよく言われています。これは、湯布院を全国的に有名にした仕掛

人の一人の中谷健太郎さんが言い出したことばです。学生は若者であり、多くの場合、よそ者です。遠慮することなく、思ったことを行動に移すことができます。そして、B級グルメの富士宮やきそばを有名にした渡辺さんが、まちづくりの担い手に「ほら吹き」を追加しました。ここでいう「ほら」は「うそ」ではなく、やきそばで富士宮市を全国的に有名にするという信じられないような話です。しかし、実際に、それを見事に実現させました。大きな野望、あるいは壮大な夢と言ってもいいかもしれません。「ほら」のような壮大な夢を語ってください。

しかし、やろうとしてもわからないことは多々あります。大人であれば質問することがはばかられても、学生であれば、まわりの大人に何でも訊けて、教えてもらえます。面倒も見てもらえます。大学周辺には、生き方を含め、色々なことを教えたがっている人が結構います。そして、学生は、失敗しても多くの場合許されます。地域の人は、一生懸命に取り組む姿に感動し、それを評価します。うまくいかなくても、地域の大人がカバーしてくれるはずです。

四　地域の方々が学生に期待するもの

一方、地域の方々が学生に期待したり求めるものがあります。若さ・明るさ・元気、やる気、発想、体力、ＩＣＴの知識などです。大人は頭が固くなっていますので、柔軟で自由な発想とともに、ホームページづくり、動画編集、ＳＮＳでの情報発信を学生に期待するかもしれません。しかし、最初は特技や知識がなくても、かまいません。経験をつめば、色々なことができるようになります。

五　地域活動から得られるもの

このような経験を通して、達成感や満足感が得られます。「やった！」「自分をほめたい」という気持ちになります。やればできるという自信が得られます。まさしく、「リア充」です。経験知という貴重な知識も得られます。「役に立った」、「貢献できた」という感覚は、やらなければ絶対に得られません。

また、これは、社会から認めてもらえる、良く評価してもらえることにもなります。私もまちにとって重要な一員という意識も芽生えます。

そして、経験を通して、人と人とのつながりが生まれ、新たな仲間も得られます。あるいは、友人との人間関係が強くなります。ともに汗を流し、ともに同じ目標を目指すことにより、損得なしのフラットな関係を築くことができます。

さらには、地域の良さを発見することもあります。今まで気づかなかった良さの新発見、場合によっては再発見です。まちに対する関心が高まり、地域への愛着が芽生え、自分のまちが好きになります。今まで気づかなかったことに気づくということは、新しい見方・視野を獲得したことも意味します。とにかく、地域活動に飛び込むと新しい景色が見えます。

このようにして、自分の世界が拡大し、気がつかないうちに人間的に成長します。そして、まちがより暮らしやすくなり、まちの知名度もアップするかもしれません。

残念ながら、現在は思いっきり地域活動を行うことはできません。コロナウィルス感染症が収束したら、大いに活動してください。本学には、グレイスをはじめとして様々なボランティア活動を行っているサークルがあります。

また、ボランティア活動支援センターも皆さんの希望を応援します。

大学四年間は人生の中で貴重な時間です。その思い出の一つとして、地域活動にチャレンジすることを強く勧めます。